



©Martin Richardson

演奏の原点

指揮者 お たか だだ あき
尾 高 忠 明

大阪フィルハーモニー交響楽団音楽監督
NHK交響楽団正指揮者
日本芸術院会員

恩師、齋藤秀雄先生がなくなられて51年になる。日本の音楽教育にこれほど大きな功績を残した人はいない。チェロ、指揮、オーケストラ、室内楽すべてのジャンルでたくさんの門下生が活躍している。

齋藤秀雄先生の戒め

自分が桐朋学園を卒業する3月のことだ。先生のお部屋に呼ばれた私は、「おめでとう！」とでも仰ってくださいるのかと思っていた。大間違いだった。「尾高、お前は22歳だ、まだ音楽はまるで分っていない。仕事も当分来ないぞ！」。私は耳を疑った。「30歳になったら少しは仕事がくるだろう。そしたら歌謡曲でもポップスでも演歌でもなんでも受けなさい」。えーと思った私に、先生は続けた。「そして40歳になったらクラシックに絞って、毎日、毎日よく反省しながら過ごさない。そして50歳になったら、やっと指揮者のひよことしてヨチヨチ第一歩が踏み出せるだろう！」。その晩はショックでやけ酒を飲んだ。

しかし、実際に30歳、40歳と年齢を重ねていったが、先生の仰ったことは本当だったと感ずるようになってきた。だから、50歳になる時、とても緊張した。さあこれからは指揮者としてしっかり歩まねば！ 晩年、先生はご自分の著書「指揮法教程」を見直そうとしてらっしゃった。それは日本のオーケストラが大変に向上し、必要な指揮法が変わってきたと仰っていた。先輩の小澤征爾さん、秋山和慶さんが外国から帰られるたびに、その指揮ぶりに感心していらした。残念ながら改訂版への着手はかなわなかったが、先生のお気持ちは後世に残さなくてはと思っている。

本当に日本のオーケストラの力量は格段にうまくなっている。海外からの音楽家も口をそろえて絶賛してくれている。そう思っていないのは、一部の「外国かぶれ」の人たちだけだ。新年に名前だけウィーンと付けたいかげわしいオーケストラを招聘しないでほしい。

コロナ禍が教えてくれた演奏の原点

2020年1月末、私は那覇にいて沖縄県立芸術大学のオーケストラと練習をしていた。那覇の港に美しい客船が泊っていてしばし見とれていた。まさか、あそこから日本中にコロナが蔓延するとは！ あの後には東京

混声合唱団の大阪公演を最後に、すべての演奏会がキャンセルになった。全世界の停滞が始まった。私は、ベートーヴェンさんたちが天井で「最近私たちの作品が聞こえてこないな〜！」と嘆いていらっしゃる気がした。3カ月ほど経ち、大阪フィルはともかく練習しようと集まって、モーツァルトのジュピター交響曲を始めた。

最初のコードで、もう皆感極まった。素晴らしい。数日後80名ほどの定期会員に来ていただいて、超ミニコンサートとなった。泣きながら聞いていたお客様もいらした。私たち演奏家にとって、こんなにも拍手がありがたいものだと感じたことはない。コロナのおかげで演奏の原点を知らせてもらった気がしている。私のひい爺さんは澁澤栄一だが、栄一爺さんが生きていたら、あの時どのように舵を取ったか？ と思った。

日本ではクラシック音楽をとて昔のものと思っっている人が大変多い。日本の古典文学などとはまるで違い、つい最近のものだ。ただ日本が鎖国をしていたためにわからなくなってしまったようだ。リヒャルト・シュトラウスもシベリウスも私が生まれた時、まだご存命だった。私の両親はラヴェルの振る「ボレロ」を聞いている。

盛田昭夫さんの文化税構想

先駆者のおかげで日本の洋楽界は目覚ましい発展を遂げたが、最後にひとつだけ申し上げたい。オーケストラは贅沢なものだが、聞く人にとってはそうではない。ピアニストのコンサート、本人と調律師の2人でなりたつ。室内楽は少し増える。オーケストラは格段に増える。「ソリスト、指揮者、事務局員、演奏スタッフ」と増えるが、それでもチケットはほぼ同等だ。これには、国の、地方自治体の、企業の援助が不可欠だ。ソニーの会長でいらした盛田昭夫さんが、「文化のための議員連盟を作っていきます。ある程度以上の利益がある企業すべてに、0.003パーセントの文化税をかける」。私は数字に弱いのでわからないが、盛田さんは「そうするとすべての芸術分野が潤う」と仰っていた。残念ながら叶わず、天国に行かれてしまった。どなたか、その意思をついでくださる方、いらしゃいませんか？

2025年度の公演活動（競輪補助事業等）について

巡回公演とアマチュアオーケストラ演奏会

2025年度は巡回公演を10回、アマチュアオーケストラ演奏会を2回開催した。

9月の岡谷公演は角田鋼亮さんの指揮、松田華音さんのピアノ独奏で、新日本フィルハーモニー交響楽団とラフマニノフのピアノ協奏曲第2番などを演奏した。モスクワ音楽院に日本人初のロシア政府特別奨学生として入学、首席で卒業した松田さんの演奏は大入りの聴衆を魅了した。

10月の水戸公演は『0歳からのオーケストラコンサート』と銘打ち、乳幼児も参加できる演奏会にした。宮松重紀さんが東京21世紀管弦楽団を指揮、クラシックの名曲のほかアンパンマンマーチなど演奏し、幼児や保護者に大好評であった。指揮は当初、米田覚士さんの予定であった。急な変更で何があったのかと思っていたところ、9月末に米田さんのブザンソン国際指揮者コンクール優勝が発表された。米田さんの巡回公演デビューはなかったが、うれしいサプライズであった。

11月の三原公演は「生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会Ⅱ」と題して、茂木大輔さんの指揮、石井琢磨さんのピアノ独奏で、広島交響楽団とガーシュインの「ラブソディ・イン・ブルー」やのだめの定番曲ベートーヴェンの交響曲第7番などを演奏した。「のだめコンサート」の生みの親ともいえる茂木さんと、人気ピアニスト石井さんの登場で会場は大いに沸いた（4頁参照）。

山形公演では、佐々木新平さん指揮の東京交響楽団が「スター・ウォーズ」などジョン・ウィリアムズの映画音楽作品を演奏した。山形ではこれまでほとんど山形交響楽団が出演してきたが、久々に在京オーケストラによる演奏会となった。

伊豆公演には東京フィルハーモニー交響楽団が登場した。伊豆市も少子化が深刻化し、中学校3校を統合して昨年4月に新たに伊豆中学校が開校された。その校歌の作曲者が青島広志さんだったことから指揮もお願いし、校歌の管弦楽版など作曲家本人が指揮するコンサートとなった（5頁参照）。

12月の舞鶴公演は佐々木新平さんの指揮、阪田知樹さんのピアノ独奏で、日本センチュリー交響楽団とラフマニノフのピアノ協奏曲第2番などを演奏した。2016年のリスト国際ピアノコンクールの覇者・阪田さんの演奏はさすがに見事で、聴衆も息をのんでいた。

日立公演には指揮に海老原光さん、ピアノに三原公

演に続き石井琢磨さんが登場し、読売日本交響楽団とラフマニノフのピアノ協奏曲第2番やチャイコフスキーの交響曲第6番「悲愴」などを演奏した。

長野では2015年からベートーヴェンの第九演奏会を行ってきた（2021年はコロナのためオペラ名曲集の演奏会を開催）。演奏は主に東京交響楽団とオーケストラ・アンサンブル金沢が担ってきたが、10回目の今回をもって最後とすることとなった。指揮は秋山和慶さん、演奏は東京交響楽団ということではほぼ1年半前から準備をしてきた。ところが、残念なことに昨年1月にマエストロが急逝された。そこで、秋山さんの次の東京交響楽団音楽監督を務めたユベール・スダーンさんに指揮をお願いすることとなった。最後の第九演奏会ということもあり、熱気に包まれた演奏となった。

独唱には一昨年の鯖江公演に出演したソプラノの吉田珠代さんも参加。当財団は2000年前後、北陸各地でベートーヴェンの第九演奏会を定期的に行い、鯖江でも20回ほど開催している。鯖江出身の吉田さんによれば、秋山先生と東京交響楽団の第九に毎年参加し、それが契機となって声楽家を目指すようになったという。当財団の活動が日本を代表するオペラ歌手を生んだことは密かな誇りである。

1月に滋賀県甲賀市で開催したニューイヤーコンサートは、藤岡幸夫さん指揮による関西フィルハーモニー管弦楽団が、2人の声楽家と日本の歌謡曲やシャンソンなどを歌いあげるとともに、ドヴォルザークの交響曲第9番「新世界より」などを演奏した。

岩手県大船渡市で行った「けせん第九」は、今回も仙台フィルハーモニー管弦楽団が担当した。指揮は岩村力さん。気仙地域は2011年3月の東日本大震災からの復興の途上にあったが、昨年2月に発生した大規模林野火災が日常生活や地域経済に困難をもたらしている。こうしたなか、今回の合唱団には多くの小中高生が参加し、地域の復旧・復興にむけて歓喜の歌声を響かせた。

アマチュアオーケストラ演奏会は、10月に初山和明さん指揮の山形フィルハーモニー交響楽団が地元山形で、11月に米津俊広さん指揮のF A F（エフ・アー・エフ）管弦楽団が川崎で演奏会を開催した。両楽団ともブルックナーの長大な作品に果敢に取り組んだ。ブルックナーの交響曲は前年も取りあげられており、この2年で第5番と4番、9番が演奏されたことになる。



2025年度 青少年の健やかな成長を育む活動 補助事業
(公益財団法人JKA 競輪公益資金補助事業)

[巡回公演] https://www.symphony.or.jp/i_annai_2025_001.html

長野県 岡谷市*	9/28 指揮	新日本フィルハーモニー交響楽団 角田 鋼亮、ピアノ 松田 華音
茨城県 水戸市	10/13 指揮	東京 21 世紀管弦楽団 宮松 重紀
広島県 三原市	11/3 指揮	広島交響楽団 茂木 大輔、ピアノ 石井 琢磨
山形市	11/9 指揮	東京交響楽団 佐々木 新平
静岡県 伊豆の国市	11/15 指揮	東京フィルハーモニー交響楽団 青島 広志 ソプラノ 横山 美奈、バリトン 星田 裕治
京都府 舞鶴市	12/7 指揮	日本センチュリー交響楽団 佐々木 新平、ピアノ 阪田 知樹
茨城県 日立市	12/7 指揮	読売日本交響楽団 海老原 光、ピアノ 石井 琢磨
長野市	12/14 指揮	東京交響楽団 ユベール・スダーン ソプラノ 吉田 珠代、アルト 谷口 睦美 テノール 澤武 紀行、バリトン 近藤 圭 ながの第九合唱団 NOVA キッズオーケストラ
滋賀県 甲賀市	2026 1/12 指揮	関西フィルハーモニー管弦楽団 藤岡 幸夫 メゾソプラノ 森 季子、テノール 竹内 直紀
岩手県 大船渡市	1/18 指揮	仙台フィルハーモニー管弦楽団 岩村 力 ソプラノ 土井 尻 明子、アルト 菅野 祥子 テノール 西野 真史、バリトン 小原 一穂 けせん第九を歌う合唱団・県内外有志

* 楽器演奏クリニック

[アマチュアオーケストラの演奏活動]

https://www.symphony.or.jp/iv_annai_2025_001.html

山形市	10/25 指揮	山形フィルハーモニー交響楽団 榎山 和明、トランペット 井上 直樹
神奈川県 川崎市	11/3 指揮	F A F 管弦楽団 米津 俊広

2025年度 特別支援学校等訪問演奏会

(日本交響楽振興財団自主事業)

https://www.symphony.or.jp/viii_annai_2025.html

瀬戸フィルハーモニー交響楽団 8 名、独唱：石井 真紀、河口 教昌		
香川県 高松市	5/25 5/26	按樹苑 (高齢者施設) 鮎の里 (高齢者施設)
オーケストラ・アンサンブル金沢、指揮 松井 慶太		
石川県 珠洲市	5/28 参加校	ラポルトすず 県立七尾特別支援学校珠洲分校 県立飯田高等学校
石川県 小松市	6/6 参加校	小松市民センター 県立錦城特別支援学校、県立小松特別支援 学校、県立小松瀬領特別支援学校
石川県 野々市市	6/10 参加校	野々市市文化会館フォルテ 県立首学校、県立ろう学校 県立いしかわ特別支援学校 県立明和特別支援学校 金沢大学附属特別支援学校
山形交響楽団 4 名 (弦楽四重奏)		
山形県 東根市	7/17	さぎの森モルダ (高齢者施設)
山形県 中山町	10/15	中山ひまわり荘 (高齢者施設)

特別演奏会「能登半島地震復興応援コンサート」

https://www.symphony.or.jp/sonota_2025.html

オーケストラ・アンサンブル金沢 指揮 齋藤 友香理、ヴァイオリン 辻 彩奈		
石川県 内灘町 珠洲市	4/5 4/6	内灘町文化会館 ラポルトすず

特別支援学校等訪問演奏会

特別支援学校等訪問演奏会は、特別支援学校オーケストラコンサートと高齢者施設などを訪問する演奏会からなっている。

特別支援学校オーケストラコンサートは、5月下旬から6月上旬にかけて石川県珠洲市、小松市、野々市市の3カ所で行った。会場はいずれもラポルトすずなど地元の音楽ホールで、児童生徒たちは学校からホールに参集し、演奏会を鑑賞した。

松井慶太さん指揮のオーケストラ・アンサンブル金沢は、打楽器奏者がコックさんの恰好をして「キッチン・コンチェルト」を演奏する一方、人気のMrs. GREEN APPLEの曲を弾いたりして、いつもながら子どもたちを大いに楽しませてくれた。松井さんの言ではないが、「励ましに来ているのだけど、かえってこちらが元気をもらってしまう」のが特別支援学校オーケストラコンサートの不思議なところである。

高齢者施設訪問演奏会は香川県と山形県で実施した。5月に行った高松市での2つ演奏会は、瀬戸フィルハーモニー交響楽団の奏者8人と声楽家2人が出向き、ヴィヴァルディの「四季」より“春”第1楽章などを演奏したほか、瀬戸の花嫁など昭和歌謡を熱唱した。

山形では東根市と中山町の高齢者施設でそれぞれ7月と10月に演奏会を開催し、山形交響楽団の四重奏団がクラシックの名曲や映画音楽、山形県民謡「最上川舟歌」などを披露した。

東根の施設では、入居中の山響創立名誉指揮者・村川千秋さんにも音楽をお届けできると期待していたが、残念ながら訪問日の3週間前に急逝され、願いはかなわなかった。

特別演奏会

この演奏会は能登半島地震の復興応援のために企画されたもので、4月5日と6日に内灘と珠洲で開催した。指揮は齋藤友香理さん、ヴァイオリンは辻彩奈さんで、オーケストラ・アンサンブル金沢とともに池辺晋一郎作曲の「祈り、そして光～能登半島地震犠牲者の鎮魂として」やブラームスのヴァイオリン協奏曲などを演奏した。

以上が2025年度の活動概要である。詳細は当財団のホームページ(HP)を参照。なお、HPには「財団ニュース」71号(2020年3月発行)以降のバックナンバーを収載しているので、こちらもぜひご覧いただきたい。

URL <https://www.symphony.or.jp>



地域から響く交響——「のだめ」企画がもたらした風穴 ～生で聴くのだめカンタービレの音楽会II～

すな だ とし はる
砂 田 敏 晴

三原市芸術文化センター副館長

街のプロフィール

広島県三原市は瀬戸内海のほぼ中央に位置する工業都市です。毛利元就の「三本の矢」の逸話で知られる三男・小早川隆景が築いた三原城の城下町でもあります。人口は約86,000人。市内には広島空港や瀬戸内に面した港、新幹線停車駅があり、交通アクセスは比較的良好です。年間を通じて気候は穏やかで自然災害も少なく、暮らしやすい街といえます。三原市芸術文化センターは2007年、建築家・楨文彦の設計により竣工し、現在開館18年目を迎えています。国内外から建築作品としての見学も多く、館長は音楽評論家の片山杜秀です。

オーケストラ公演の難しさ

オーケストラ公演はクラシック音楽の「花形」として認知されながらも、多くの聴衆にとってその中身は必ずしも理解されていません。教科書で習った曲や作曲家の肖像は覚えていても、学校を卒業すると生のクラシックに接する機会は急速に減ります。地方では交通費や公演情報の乏しさ、人材や資金の制約により、さらにその傾向が強くなります。

そんな現状に風穴を開けたのが、約20年前に登場したコミック「のだめカンタービレ」でした。作品は多くの読者を魅了し、アニメ化・ドラマ化を経てその影響力は現在まで続いています。あるご縁で、愛知県の公益財団法人かすがい市民文化財団が行っている「生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会」について知り、地方の財団がクラシック音楽を積極的に発信していることに大きな感銘を受けました。ぜひ当館でも開催したいという強い思いから、のだめ音楽会が実現しました。



(写真提供：2枚とも三原市芸術文化センター)

演奏は広島交響楽団。今回で2回目となるコンサートは、地方におけるオーケストラ公演の状況に新しい可能性を示したと言っても過言ではありません。これまでクラシックの演奏会といえば、60代後半から80代のお客様が中心でしたが、本公演にはご年配の方に加え40代の方やそのお子様方など幅広い世代が来館し、クラシックコンサートとしては異例の盛り上がりを見せました。

特筆すべきは、演奏曲目がすべて純然たるクラシック音楽であることです。ともすれば観客動員のために映画音楽やアニメソングをプログラムに入れがちですが、この企画ではそうではありません。クラシック音楽のみを、しかも丁寧な解説付きで演奏するのです。コミックのファンにとっては、生演奏を聴ける喜びに加え、ドラマやアニメで親しんだ曲を解説付きで味わえるという、まさに至福の体験となりました。結果は大盛況。地方の会館にとってこのような企画は願ってもないものであり、クラシック音楽に触れる機会を劇的に増やした「のだめ」と本企画の貢献度は計り知れません。

地方の現実

しかしながら、クラシック音楽鑑賞の盛り上がりは全国的に見ると決して十分ではありません。特に地方では一定数のコアなファンに支えられているものの、会館の運営は厳しい状況が続いています。日本の伝統芸能も同様で、各機関からの助成金なくしては良質な企画であっても実現が難しいのが現実です。近年、地方ではクラシック公演が激減し、チラシの挟み込み依頼をする先がなくなっているほどです。交通費の負担、人材不足など地方特有の課題も重なり、負の空気が流れていると感じます。ある施設では関連機関の会費負担から脱退を余儀なくされていると聞きます。これが地方の厳しい現実です。

継続の意義

それでも、かつてリベラルアーツのひとつとして位置づけられていた「音楽」をやめるわけにはいきません。上質で高度な芸術を地方にも届けたい、世代を超えて共有したいという信念は揺らぐことはありません。クラシック音楽は人々の心を豊かにし、人生を彩る力を持っています。だからこそ、困難な状況にあっても継続する意義があるのです。地方の文化を支えるひとつの柱として、これからもクラシック音楽を届け続けたいと考えています。

無理難題——校歌の依頼を受けて

あお しま ひろ し
青 島 広 志
作曲家



団体歌と言われる曲を、かなりの数書いて来た。中でも多いのは校歌（園歌を含む）である。初期は作曲だけだったが、近年は詩も同時に頼まれるようになった。謝礼が2倍になるかと思って喜ぶのも束の間、一人の作者だからと割引かれるのは辛い、まあ仕方ないだろう。これは演奏会の出演も同じで、指揮・ピアノ・司会と兼ねるのに、一人分の値段しか来ない。編曲や作曲も含まれてしまうことさえあるのだ。でも声がかかるとだけ幸せだと思って、我慢している。

制約の多い校歌制作

依頼が来るのはその学校の校長や音楽教師からであったり、教育委員会などが窓口になっている場合が多いが、いずれにせよ様々な制約がある。納品（曲は品物なのか？）期日は当然のこと、詩の言葉に関しては細かすぎるほどの条件がつく。それなのに曲についてはほとんど何も言われない。ということは音楽的素養に欠けているらしい。一般に斉唱ピアノ伴奏付きで書くのだが、合唱や吹奏楽版については言及されない、当方から申し出る必要がある。音楽教師や第三者が勝手に書いてしまう危険性があるからだ。

まず詩を書くために現地へ赴くことになる。そこで当地の名物や名産、景勝、そして学校の方針などが示されるのだが、無理難題とも思われる提示もある。校

名が長い（千葉日本大学附属第一小学校など）は仕方ないとして、全く見えなくなってしまった山や川（富士山や江戸川）、近い内に消えてしまうであろう周囲の情景（梨園・葱畑）は、まず無意味だろうし、3番までの詩に四季を折りこめとか（現在・過去・未来はOK）、質実・剛健・柔和といった全く違った曲想を盛り込めというのは、通作歌曲（繰り返しがない）か、和音のニュアンスで変えるしかないが。一般の先生方はそれに気付いてくれない。

また、詩だけを先にほしいと言って来るが、作者が同一の場合、詩と曲を同時に作って行くので不可能なのだ。仕方なく完成した作品のうち詩だけを書き出して見せると、校歌制定委員会から“物言い”がつく。例えば若葉高校なので「若葉に伸ばす君の手がまぶしい」（石坂洋次郎風）と書くと、エロティックだから書き直せとか、「3年が過ぎ」と書くと「3年で卒業しない生徒に悪いから数年と書け」と言って来る。そして、どの番も同じ字数、イントネーションを使っていることなど気にもとめないのだ。

胸を張れる我が校歌

最も新しい伊豆中学校からは「わさび」「富士」「自然」が出たので、「ピリッとした味が好き／わさび田を流れる水が好き」「サラッとした風が好き／富士から吹きつける風が好き」と並べ、3番は「さえずる鳥の歌が好き……」と並べてみたら好評だったが、困ったのは東京フィルハーモニー様の公演で管弦楽版を作った折の編曲が難しかったこと。ない知恵をしばって、1番はシンバル、2番はウィンドチャイム、3番はピッコロを使ったが、読みにくい総譜となってしまった。

音楽上の提案がされたこともある。2つの学校が合併する際に、2校の校歌を引用してほしいと言うのだが、何とかそうしてしまった自分が情けない。しかし、幾多の校歌を鑑賞教室で演奏して来て、我が歌が最も優れていると胸を張って言えるようになったことを、ここに記す71歳である。



青島広志氏と東京フィルハーモニー交響楽団【伊豆公演】



「新しい挑戦+あきらめない心=〇〇」

いし い た く ま
石 井 琢 磨
ピアニスト

自分にできることはなにか。自分にしかできないことはなにか。コロナ禍を経験して、常に自問自答してきた。かつての名作曲家たちも同じであったのではないか。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェンは音楽業界に新しい風を吹かせ、フランツ・リストはピアニストの演奏業態に革命を起こした。あげればキリがないが、新しいことに常に挑戦し続けてきた作曲家を前に、自分もそうあるべきだ。そう言い聞かせてきた。古き良きクラシックに重きを置き、新しいアプローチでクラシックの良さを広め続けている石井琢磨のお話を少しだけ聞いてください。

人を幸せにする音楽

まだ13歳だったころ、とある演奏会後に「あなたの演奏を聴いて幸せになった」と伝えられ、自分の音楽が人を「幸せ」にすることができるなんてと衝撃を受け、ピアニストを目指した。まさに青天の霹靂であった。

東京藝術大学を卒業後、ウィーン国立音楽大学に進学。ウィーン国立音大修士課程を修了した。偉大なる作曲家、著名な音楽家のほとんどがヨーロッパで研鑽を積んでいる、もしくは積んでいた理由が知りたくて、日本からオーストリアに拠点を移した。10年以上住んでみるとわかるが、いや、その国の言語を扱い、住んでみないとわからないことが多々あった。ドイツ語の文節からブラームスのフレーズを読み解くことや、モーツァルトの装飾音を建築物から読み解くことなどだ。内容は話すと長くなるので、これはまた別の機会にしよう。とにかく、長年の経験から、「クラシック」という土俵においてヨーロッパで学ぶことは必須だった、ということだった。

ペーター・エフラーから「音楽はとても抽象的なものだ。コンクールという場合は賛否があるが、賞歴の有無は少しだけあなたの芸術を確固たるものにするよ」といわれ、エネスク国際音楽コンクールに挑戦し、第2位を受賞した。レオンスカヤやラドゥ・ルプーが覇者に名を連ねるコンクールだったので、エフラーの言った通りヨーロッパで少しずつ演奏の機会が増えていった。

* * *

YouTubeチャンネル「TAKU-音 TV たくおん」の開設

そんな中コロナ禍になり、演奏会は全てキャンセル、延期になった。「ピンチをチャンスに」というスローガンを掲げて、YouTubeチャンネル「TAKU-音 TV たくおん」を開設した。「クラシックをより身近に」をコンセプトに、クラシックの良さを伝えるチャンネルだ。

まさに人生の転機だった。沢山の不安もあったが、かつての作曲家がそうであったように、新しい挑戦することに大義名分を持たせ、自分に言い聞かせてがむしゃらに走り抜けた。動画編集も一から学び、企画発案、キャスティング、カメラワーク、最初は何からなにまで全部自分でやった。しかし、ことはそう簡単には運ばない。動画を40本出して10カ月間投稿し続けて、登録者は856人だった。しかし、当時こう考えた。856人の方々が動画を楽しみにしてくれている。数字ではなく、しっかり一人ひとり想像して動画を配信しよう、と。気持ちが視聴者様に伝わったのか登録者はぐんぐん増えて、わずか2年で10万人を超えた。そして同時に「夢の発表」に重きを置き、応援してくださる方とともに走るスタイルを確立した。従来のクラシックアーティストとは違う形でムーブメントを起こしたい、そう考えたのだ。舞台での表現のみならず、SNSを駆使し、自分で「夢」という道を作り、ともに走るスタイルだ。

夢は「ピアクロ」で武道館公演

サントリーホール大ホールソロリサイタル、47都道府県ツアー開催、ファンクラブ開設、ベルリンフィルハーモニーホール・デビュー、ベルリン交響楽団とのツアーを夢に掲げ、全て叶えた。

そして、石井琢磨は2026年1月にとんでもない夢を発表した。4台ピアノ男性8人プロジェクト「PIANO CLOVER」、略して「ピアクロ」で武道館公演をする夢だ。4台ピアノ16手が奏でるベートーヴェン「運命」は、聴いたことのない圧巻のサウンドだ。ぜひ聴いていただきたい。そして夢が叶うようにともに走ってほしい。新しい挑戦+あきらめない心の「答え」を一緒に見ませんか？

絶対にいつか武道館公演するので一緒についてきてください！

創立80周年を迎え、更なる飛躍を目指す東響

ひろ おか よし たか
廣 岡 克 隆

東京交響楽団 楽団長



私が東京交響楽団（以下、東響）に入団したのは、1998年のこと。東京藝術大学でヴァイオリンを専攻しており、師匠である清水高師先生に薦められたアシスタント・コンサートマスターのオーディションに合格し、入団いたしました。そこから30年近く、奏者として、そして楽団長として時間をともに歩んできた私から見た東響について、音楽監督を通して綴ってみたいと思います。

東響は本年2026年に楽団創立80周年を迎え、第4代音楽監督にロレンツォ・ヴィオッティ氏を迎えます。80年の歴史の中で、音楽監督がわずか4人というのはオーケストラとしては非常に稀なことで、それだけに歴代の音楽監督が長きにわたり楽団を導き、良い関係のもと音楽的な基盤を築いてきた証でもあります。

初代音楽監督 秋山和慶

秋山氏が東響を指揮してデビューされた翌年1964年、東響は経営破綻という危機に直面しました。楽団の将来が見えない中、秋山氏を中心に危機をともに乗り越える過程で、家族のように互いを支えあう雰囲気



©TSO

が楽団の中に自然と生まれていきました。東響は「温かい音」とよく言われますが、その音色はまさに苦難を乗り越え、支えあった精神が形になったものだ、と言えるのではないのでしょうか。

第2代音楽監督 ユベール・スダーン

スダーン氏は古典派のレパートリーを積極的に取り上げ、ピリオド奏法など当時の様式を取り入れながら、精緻なアンサンブルと音楽の方向性について、私たちに実に厳しいトレーニングを課しました。その結果、



©N. Ikegami

東響は古典派の奏法に精通した機能的なオーケストラへと成長しました。この変化は楽員の内面にも影響を及ぼしました。

私が入団した頃には、自分たちのオーケストラを“三流”などと卑下する声も少なくありませんでした。しかし、

スダーン氏と音楽を創っていく過程において、そうした言葉を耳にすることは全くなくなりました。「古典派の奏法ならこのオーケストラにも負けない」という揺るぎない自信が、東響の楽団員であることに対する誇りへと姿を変えていったのだと思います。

第3代音楽監督 ジョナサン・ノット

ノット氏と共に歩んだ12年間で最も大きく変わったのは、奏者が“自らアンサンブルをできるようになった”という点かと思います。リハーサルにおいては、どのラインに意識を集めるべきかを徹底され、その結果、本番で彼があえてリハーサルと違う振り方をしても、奏者は“どこに集まればいいのか”を理解している。そこに向かって全員が自発的に集まろうとする過程で、自然と音楽的なうねりが生まれるようになりました。



また、彼は音楽を“縦”に、すなわち和声から組み立てていきます。この和声を支える重要な役割を担うのが内声。内声がしっかり音楽を動かし、その上にメロディーが乗ることで、そこにも大きなうねりが生まれる。こうした考え方がオーケストラ全体に広がったことにより、ノット氏でない時も自発的に音楽を創り、アンサンブルができるようになったので、常に高い水準の音楽を届けることができるようになったと思っています。

第4代音楽監督 ロレンツォ・ヴィオッティ

36歳の若き指揮者ヴィオッティ氏は、当楽団で指揮者のキャリアをスタートし、この10年余りでヨーロッパ各地で華々しいキャリアを築き、このたび音楽監督として凱旋いたします。彼との音楽創りは未知数のところもありますが、これまで以上に高い水準の演奏を



求められることでしょうか。その期待に応えるため、真摯に研鑽を重ねることで、東響は更なる飛躍を遂げることができると確信しています。

来年度からの新しい東京交響楽団にどうぞご期待ください。

(写真提供：東京交響楽団)

ご支援いただいている団体・企業

団体

(一社) 日本建設業連合会

石油連盟

(一社) 日本鉄鋼連盟

企業

朝日生命保険(相)

旭化成(株)

アサヒグループホールディングス(株)

岩谷産業(株)

A N Aホールディングス(株)

E N E O Sホールディングス(株)

(公財) オリックス宮内財団

王子ホールディングス(株)

(株)河合楽器製作所

キッコーマン(株)

キヤノン(株)

キヤノンマーケティングジャパン(株)

K D D I (株)

三機工業(株)

清水建設(株)

信越化学工業(株)

住友化学(株)

住友商事(株)

住友生命保険(相)

住友林業(株)

セイコーグループ(株)

積水化学工業(株)

損害保険ジャパン(株)

(株)大和証券グループ本社

第一生命保険(株)

大成建設(株)

中外製薬(株)

トヨタ自動車(株)

東京海上日動火災保険(株)

東京ガス(株)

東レ(株)

(一財) TOPPAN三幸会

(株)日新

(株)日清製粉グループ本社

日本ガイシ(株)

日本製紙(株)

日本製鉄(株)

日本生命保険(相)

野村ホールディングス(株)

浜松ホトニクス(株)

(株)日立製作所

東日本旅客鉄道(株)

(株)フジテレビジョン

富士通(株)

前田建設工業(株)

丸紅(株)

三井住友海上火災保険(株)

三井不動産(株)

三菱重工業(株)

三菱地所(株)

三菱電機(株)

明治安田生命保険(相)

(株)ヤマハミュージックジャパン

ユニ・チャーム(株)

(株)龍角散

ローム(株)

編集だより

□巻頭言は指揮者の尾高忠明さんにお願しました。超多忙なマエストロですので、執筆依頼するのをすこし躊躇しましたが、快く引受け、しかも予定より早く入稿していただきました。当財団の設立は1973年(昭和48年)3月末、それから間もない1975年2月の演奏会に、若き指揮者・尾高忠明が指揮台に立っています。ですので、交響楽振興財団とのかかわりは、事務局や経団連のだけよりも長いものとなっています。以来、マエストロには日本中いたるところで開催したコンサートで指揮をしていただきました。2026年度もご出演いただく予定となっています。

□青島広志さんにもご執筆いただきました。ほとんどの人にとって校歌とは既にあるものですが、新たにつくる側にしてみればさまざまな制約や葛藤があります。青島先生はそれをリアルに描写してくれました。発注者側が真面目であればあるほど、作曲者は困惑し、苦悩します。本稿は一種の狂騒曲として面白く読める内容となっています。ぜひご一読を!

□演奏家ではピアニストの石井琢磨さんに寄稿していただきました。2024年度~25年度は22回の巡回公演を行っていますが、石井さんにはそのうち3公演(大響・大和高田、広響・三原、読響・日立)に独奏者として出演し、最多登場アーティストとなっています。3公演とも違う楽団との協演というのは、楽団からの信頼が高い証しです。武道館での「ピアクロ」公演をぜひ実現させてほしいと願っています。

□各地の音楽事情については、ポポロ(三原市芸術文化センター)の砂田敏晴さんに執筆をお願いしました。三原公演は久々の広島県東部での演奏会となりました。地方都市におけるオーケストラ公演の難しさと、それにもかかわらず継続することの意義を語っていただきました。行政や企業の芸術文化支援関係部署の方々にぜひ一読してもらいたい文章です。

□プロオーケストラでは、東京交響楽団の廣岡克隆さんにご登場いただきました。東京交響楽団とはこれまで多くの演奏会をともにしてきましたので、その家族的雰囲気は端から見ても感じます。廣岡楽団長には秋山和慶、ユベール・スターン、ジョナサン・ノット、ロレンツォ・ヴィオッティといった歴代音楽監督を通して、東響が繰り出す音楽の進化について紹介していただきました。創立80周年を迎え、新しい指揮者のもとでさらに躍進する東京交響楽団に期待したいと思います。

□2026年3月1日現在の理事、監事、評議員、顧問は次のとおりです。理事:会長 日比野隆司、専務理事 久保田政一、大谷康子、三枝成彰、高松則雄、平山知行、林寛爾、監事:岸本政昭、藤原清明、評議員:海老澤敏、小宮山淳、佐沢英紀、寺西基之、津村良和、根本勝則、堀正文、顧問:岩沙弘道、榊原定征、原良也(敬称略・順不同)。

公益財団法人 日本交響楽振興財団

〒101-0047 東京都千代田区内神田3-9-3
電話 03-3253-2032 FAX 03-3253-0566
編集・発行人 林 寛爾

E-mail nihon@symphony.or.jp
URL https://www.symphony.or.jp

2026年3月1日発行